

【第三種郵便物認可】

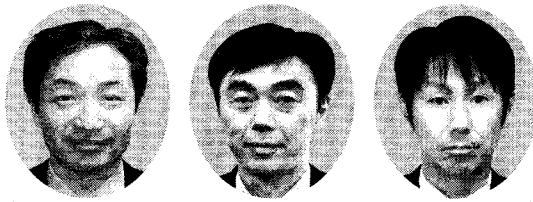
プログラミング言語「Ruby(ルビー)」を武器に、県外のソフトウェア開発案件を開拓したい。島根県内のソフト開発会社約40社が2008年に設立したのが「しまねソフト産業ビジネス研究会」だ。受注獲得に向けて受け皿の役



目を果たすだけでなく、ソフト開発者の育成も進めていく。

音頭を取るのはソフト開発で県内最大手、テクノプロシエクト(松江市)の吉岡宏社長(57)だ。研究会の発足当時、ミニブログ「ツイッター」などでも使われるルビーの開発効率の高さ

### しまねソフト産業ビジネス研究会 (島根県)



左から吉岡、井上、浅田の各氏

に取り組み始め、業界でも「推進母体が必要」と吉岡社長が各社を訪問して参加を呼びかけた。「業界を活性化することで地域振興に役立ちたい」との思いもあった(吉岡社長)。

研究会では外部の講師を呼んで県外の市場動向を研究する勉強会などを実施する。研究会がネットワーク機能を果たすことで、受注案件に応じて協力し合う関係が生まれた。従来、各社は県内の案件に対して競合

## 「ルビー」活用チームで支援

が注目されていた。開発者のまつもとゆきひろ(本名松本行弘)氏は松江市に住んでおり、地元には習熟したプログラマーも多い。県もルビーに着目して「情報技術 産業の振興

研究会はテーマごとに分科会に分かれて活動する。科会に分かれて活動する。科会に分かれて活動する。

ルビー開発分科会の会長を務めるのがネットワーク

注者からも安心して仕事をまかせてもらえるようになった」と話す。

最近の市場動向について、吉岡社長は「設計図を無償公開するオープンソースソフトや、その一つであるルビーを使う開発案件が増え、研究会に追い風が吹いている」と分析する。

現在では、研究会に加盟の数が新人社員研修を合同で実施するなどの動きも芽生えてきた。今後は各社間の交流を活性化し、人材育成にもつなげる考えだ。(松江支局長 古田博士)